

# 文学の葉

## 「恋と革命に生きた女たち」展に寄せて

—瀬戸内寂聴さんの伝記小説—

館長 今川英子

瀬戸内寂聴さんは、「人間が生きてくるとは、自分の中の才能を極限に押し開いてみる」と「だと繰り返して語り、自己の意思のままに、恋に思想に芸術に一途に生命を燃焼させた女たちを一貫して書き継いできました。」

一九二二年、徳島に生まれた瀬戸内さんは、二一歳で結婚、翌年長女を出産しますが、夫の教え子だった年下の男と恋におち出奔、小説家への道を歩みはじめます。

一九五六年発表した「女子大生・曲愛玲」が新潮社同人雑誌賞を受賞して文壇に登場。次作の「花芯」では、官能に翻弄される女生を描きますが、評論家からは、「『子宮』という言葉の乱用」と酷評され、「以後五年間、文芸雑誌に発表の機会を与えられなかった」といいます。しかし自己の文学的信念を押し通し、翌年には改稿した「花芯」を刊行。さらには田村俊子を知る人々を取材し、遺されたノートや手紙を手がかりにその生涯に肉迫した伝記小説『田村俊子』を執筆、第一回田村俊子賞を受賞します。

対象となる人物への限らない共感と愛情に支えられた独自の伝記小説は、事実の正確さや克明さを超えて人間的真實に迫り、読む者を魅了します。

夫一平の庇護のもと、才能を開花させた岡本かの子を描いた『かの子撩乱』、嵯峨野祇王寺の庵主となった芸妓の数奇な運命を追っ

た『女徳』、恋と革命に生きた伊藤野枝を写した『美は乱調にあり』『諧調は偽りなり』、世界的に活躍した日本最初のプリマドンナ三浦環の生涯を描いた『お蝶夫人』、大逆事件に関わり自殺した金子文子を描いた『余白の春』、大逆事件で死刑になった菅野須賀子を描いた『遠い声』、平塚らいてうと青鞥社の女たちを描いた『青鞥』等々。

これらの作品は、生に対する猛烈な意欲と情熱ゆえに、真摯に自己を貫き通そうと波乱に満ちた人生を選び、旧来の道徳や体制的秩序におさまられなかった女たちの物語とも言えます。作者は彼女たちの激しい生を肯定的に捉え、その死の悲惨は、「世にも美しい聖なる死と映ってくる」と述べています。

私の修士論文「岡本かの子論」は、『かの子撩乱』を読んだことがきっかけでした。その頃、冬樹社から岡本かの子全集が刊行中で、研究篇を担当していた恩師熊坂敦子先生の助手として取材や資料調査に携わったことが、研究の道へとつながったことを思い出します。



宗左近 書

1919-2006 詩人、評論家、  
仏文学者。戸畑区出身

### 目次

- 「恋と革命に生きた女たち」展に寄せて…………… 1
- 第14回特別企画展 生誕110年 林芙美子展…………… 2
- 一風も吹くなり、雲も光るなり—
- 開会記念対談 大泉滯さん×今川英子（北九州市立文学館館長）… 3
- 川本三郎さん講演会「モダン都市社会のなかの林芙美子」
- 文学講座（全4回）「林芙美子を読む」…………… 4
- 角田光代さんトークライブ…………… 4
- 林芙美子展関連イベント
- 太田治子さん講演会「林芙美子の愛」
- 映画「BUNGO ～ささやかな欲望～」上映
- 第32回林芙美子忌の集い
- 劇団青春座公演…………… 5
- 「もう一つの放浪記～花のいのちはみじかくて～」
- 小倉昭和館協賛映画祭 北九州文学散歩 林芙美子と郷土作家たち
- 北九州市立文学館「文学館セミナー」
- 新資料紹介 夢野文代・眞田宏資料
- 平成25年度夏の企画展 忘れてはイケナイ物語り 北九州篇… 6
- 戦争童話集原画展 作 野坂昭如 絵 黒田征太郎
- 黒田征太郎さん開会記念講演…………… 7
- 黒田征太郎さんのおえかき部屋
- 戦争童話集 朗読会
- 開催予告 第15回特別企画展…………… 8
- 恋と革命に生きた女たち
- 資料寄贈者・提供者、受贈雑誌一覧

北九州市制50周年記念 第14回北九州市立文学館特別企画展  
 生誕110年

# 林芙美子展

国はなごころ 雲もはなごころ

平成25年4月20日～6月9日



北九州市制50周年を記念して、4月20日～6月9日の期間、現門司区出身の作家林芙美子を紹介する特別企画展を開催しました。この展示は、尾道市立美術館、かごしま近代文学館、新宿歴史博物館との4館協働企画として、およそ一年をかけて各館を巡回する大きな展覧会となりました。

## ■構成

### I 林芙美子の生涯

#### ●ふるさと

生誕地や両親の紹介をはじめ、九州各地を転々とした幼少時代、尋常小学校から女学校へと進んだ尾道時代を紹介。展示した女学校時代の校友会誌「真多満」（「仏通寺旅行記」掲載）や、友人に宛てたハガキの文面からは、芙美子の文才の萌芽を見ることが出来ます。

#### ●作家デビュー

女学校卒業後上京、職を転々としながら詩作を続け、『放浪記』でデビューした東京時代を紹介。雑誌「女人芸術」、「改造」などに掲載された初期の作品を展示し、詩人から小説家へと変貌してゆく過程をご覧いただけます。

#### ●扉を開ける

『放浪記』のベストセラーで作家への扉を開けた芙美子の、中国、パリへの旅を中心に紹介。芙美子のパリ滞在中の日記、小遣い帳とともに、交友のあった森本六爾（考古学者）へ芙美子が宛てた書簡や、同時期に綴られた六爾の日記（共に京都大学大学院文学研究科考古学研究室蔵）を展示しました。

#### ●戦塵の下

多くの作家が従軍作家として戦時体制に組み込まれた戦時下での、芙美子の足跡をたどりました。従軍時（中国や南方）の手帳や新聞記事、疎開中に執筆された童話や草稿などを展示。特に、近年研究が進み明らかになりつつある南方従軍時の足跡を、地図パネルに表しました。

#### ●い、ものが書ける

敗戦後、執筆活動を再開し、47歳で急逝するまで書き続ける芙美子。戦争の傷を背負って生きる庶民に寄り添った晩年の作品群を、初出雑誌や原稿、パネルで展示しました。詩稿「風も吹くなり 雲も光るなり」（赤毛のアン記念館・村岡花子文庫蔵）には、多くの感動の声がかれました。

#### ●林芙美子と旅

芙美子が生涯に旅した足跡を、2枚の地図パネル（日本・世界）で紹介しました。仕事や旅行で全国各地を巡っており、非常に行動力のある女性でした。

### II 林芙美子のおもかげ

書斎の再現をはじめ、着物、ワンピース、靴（屋久島取材時）、トランク（漢口従軍時）などの遺愛品、絵画や書物展示、面影をたどりました。また、交友のあった作家（川端康成、小林秀雄、九鬼周造、井伏鱒二ほか）からの芙美子宛書簡を、前・後期に分けて展示しました。展示資料点数 約250点

#### アンケート

・多くの資料により、『放浪記』だけではない芙美子の多彩な面を知ることができました。

（60代・女性）

・芙美子の生き方、志や心情が伝わってくる展示でよかった。

（30代・男性）

・自筆の書簡や日記、絵画を見ることができ感動しました。芙美子に生きていく力を与えてもらった気がします。

（40代・女性）

## 開会記念対談

大泉淵さん（大泉黒石四女）×  
今川英子（北九州市立文学館館長）



大泉淵さんと今川文学館館長

平成25年4月20日

開会を記念して、生前の林美  
美子をよく知る大泉淵さんに、  
思い出をお聞きしました。

淵さんは、ロシア文学者・大  
泉黒石の四女です。幼少の頃、  
美美子の隣家へ引越したこと  
から交流が始まりました。当時、  
黒石氏には七人の子供がおり、  
垣根をくぐっては美美子の家に  
遊びに行っていたそうです。美  
美子は子供達を愛おしみ、淵さ  
んが水仙の花を「葱に花が咲い  
た」と言ったというエピソード  
は、『厨女雑記』にも書かれま  
した。昼間は美美子の家に泊ま

りたがっても、夜になると心細  
くなり「おうちに帰りたい」と  
言う淵さんを、だっこして家ま  
で連れて帰ってくれたこと。別  
の場所へ引越した直後、美美  
子に会いたくて歩いて家の前ま  
で行った淵さんに、「一人で来  
たの？」と驚き心配しながらも、  
嬉しさに涙を流した美美子。尽  
きない思い出を語られました。

戦後すぐから美美子の家に住  
み、身の回りの手伝いや泰ちゃ  
ん（美美子の養子）のお世話、  
来客取り次ぎなどをされました。  
伴われて外出する機会も多く、  
美美子は自分の服と一緒に、淵  
さんの服をひと山買い求めたこ  
ともありました。「淵ちゃんに  
似合うから」と選んでくれた  
真っ赤なコートが今でも印象に  
残っていると話されました。

淵さんは美美子の最期も看取  
られました。深夜に仕事から帰  
宅してから亡くなるまでを、昨  
日のことのように詳しくお話し  
くださいました。

子供好きで、特に淵さんを我  
が子同然にかわいがった美美子。  
「おばさま」と親しみをこめて  
美美子を呼び慕う淵さんのお話  
に、会場はあたたかい空気に包  
まれました。

## 評論家・川本三郎さん講演会

「モダン都市社会のなかの林美美子」

平成25年5月25日

『林美美子の昭和』の著者、  
川本三郎さんにご講演いただき  
ました。

はじめに林美美子の作品につ  
いて『風琴と魚の町』、『放浪  
記』を例に、文章が現代的でか  
わいらしさがあると指摘されま  
した。擬声語や方言といった日  
常的な言葉の多用によって、現  
代の若い人が読んでも親近感が  
わく点が今でも読み継がれてい  
ると評されました。

美美子が上京した直後の東京  
は、関東大震災が起き、その後  
急速に近代都市として生まれ変  
わるエネルギーに溢れた過渡期  
でした。モダン都市社会が形成  
されるなかで、女性が自活し、  
一人（＝孤独）になれる時間が



川本三郎さん

持たたことは、美美子が作家と  
して成功する重要な要素だった  
のです。さらに、美美子は歩く  
ことが好きでした。一人で歩く  
ことによって、風景や街、人々  
の暮らしを見、考える時間が必  
然的に増えます。美美子にとつ  
て「歩くこと」＝「書齋代わ  
り」になったと指摘されました。  
多くの旅をした美美子ですが、  
特にシベリア鉄道でパリへ旅し  
たことに注目、当時富国強兵を  
目指した国家体制下で、ドイツ  
やイギリスへ留学する知識人が  
多いなか、芸術家が憧れたパリ  
へ旅したことは、美美子らしい  
と話されました。

最後に、戦後の美美子につい  
てお話されました。戦後を民主  
主義の「明るい時代」と捉える  
か、復員兵や戦争未亡人など社  
会の暗い部分を生んだ「暗い時  
代」と捉えるか分かりますが、  
美美子は後者でした。戦争に傷  
ついた庶民に寄り添った優れた  
短編が多く、うち「骨」、「河  
沙魚」を紹介。小説の終わり方  
が秀逸で、主人公はどんなに傷  
ついていても、逞しく生きてい  
くのだろうという「救い」が読  
み取れ、そこに魅力があるので  
はないかと締めくくりました。

## 文学講座

「林美美子を読む」

講師：今川英子（北九州市立文学館館長）

●第一回目 4月20日（土）

誕生から九州を転々とした幼  
少期。「九州炭坑街放浪記」を  
社会情勢と共に紹介しました。

●第二回目 5月11日（土）

尾道から上京し作家デビュー  
まで。関東大震災後モダン都市  
として生まれ変わる東京で、書  
くことが生きることでした。

●第三回目 5月18日（土）

パリ時代。日本人留学生との  
交流、森本六爾、白井晟一との  
日々を日記をもとに辿りました。  
特に白井との恋と別れの経験は、  
「いい作家になりたい」という  
美美子の想いを強くしました。

●第四回目 6月1日（土）

戦中から戦後。従軍作家とし  
て中国や南方に赴き注目を集め  
ますが、戦争の実態を知るにつ  
れ、次第に沈黙。戦後は戦争で  
傷ついた庶民に寄り添った作品  
を多く残しました。

美美子の人と作品、生きた時代  
を読み解く講座となりました。

## 角田光代さんトークライブ

聞き手・文学館学芸員  
(中西由紀子、小野恵)

平成25年5月30日

直木賞作家・角田光代さんの  
トークライブを開催しました。

角田さんは、「旅という覚醒」  
〔『林芙美子 女のひとり旅』〕  
で林芙美子の旅について書かれ  
ています。



角田光代さん

## 林芙美子関連イベント

### 太田治子さん講演会

#### 「林芙美子の愛」

林芙美子資料保存会  
平成25年5月12日

『石の花―林芙美子の真実』  
の著者、太田治子さんの講演が  
行われました。

芙美子は誰に対してもはつき  
りと「本当のこと」を言い、権  
力者にも決して媚を売らない女  
性でした。そこに芙美子が誤解  
され、悪く言われる原因がある  
と指摘されました。しかし、当

の芙美子は悪口を言う人々の次  
元をはるかに超越しており、そ  
こが人間的な魅力にもつながる  
と話されました。

また、芙美子が戦争協力をし  
た作家として語られることが、  
残念だとも話されました。著書  
に「兵隊さんが好きだ」と書い  
たのは、決して戦争を賛美した  
わけではなく、庶民の代弁者と  
しての言葉でした。戦争賛美を  
高らかにうたう作家がいるなか、  
芙美子は自分の目で現実を見、  
戦争の実態を書きました。

戦後も、傷ついた人々に寄り  
添って書き、それは、「同情」



太田治子さん

最後に、亡くなる直前まで書  
き続けたエネルギーを称賛、こ  
れからも芙美子を敬愛し続ける  
でしょうと講演を結びました。

### 映画「BUNGO」ささやかな 欲望」上映

林芙美子資料保存会  
平成25年4月26日

岡本かの子、坂口安吾、林芙  
美子の短編小説をオムニバス形  
式で映像化した作品の上映会が  
行われました。林芙美子原作  
「幸福の彼方」(監督・谷口正  
晃、脚本・鎌田敏夫)は、戦争  
で隻眼となった男と見合結婚し

ではなく「共感」から生まれる  
ものでした。晩年の『浮雲』は、  
これまでの苦勞が昇華された素  
晴らしい作品だと評されました。  
何度絶望のどん底に落ちても、  
新しい出発につなげていく芙美  
子の生き方を知ることが、今の  
日本には大切なことではないで  
しょうかと主張されました。

た女の話。戦争で妻子と引き離  
された男の過去を知り、悩みな  
がらも共に生きていこうと決意  
するストーリーが、叙情溢れる  
映像で蘇りました。

### 第32回 林芙美子忌の集い

小森江西校区まちづくり  
自治連合会  
平成25年6月23日

6月28日の林芙美子の命日に  
ちなんで毎年開催されています。  
今年も、野田敦子さん(機関紙  
「浮雲」の編集人)による講演  
が行われました。「林芙美子讃  
歌 顕彰と継承」と題し、全国  
に点在する芙美子の文学碑を紹  
介されました。

アトラクションでは、羽山神  
社の奉納太鼓として伝承されて  
いる「羽山太鼓」の競演、オカ  
リナグループ・フレンズによる  
オカリナの演奏が行われました。  
最後に献花をし、芙美子を偲び  
ました。



野田敦子さん

## ■旅

角田さんは、林芙美子の『下  
駄で歩いた巴里』を読み、パッ  
クパッカー的な旅の仕方に驚か  
れたそうです。芙美子は、街を  
「歩く」ことによって生活者に  
近い目線で旅をしました。また、  
パリへ旅した28歳という年齢に  
も着目。人生を左右する旅は、  
20代で経験することが多いと指  
摘されます。同じ旅でも、10代  
だと経験そのものが上回り、言  
葉や感性がついていかず、20代  
になってようやく言葉と感性が  
経験に追いつく――。パリへの  
旅が、決定的に後の芙美子の人  
生に関わったのではないかと話  
されました。

## ■日常

角田さんは、芙美子が日々の

暮らしの細部を丁寧に綴る点に  
共感すると言われます。たとえ  
日常の対極と考えられる状況  
(「犯罪、戦争など」)でも、紛  
れもなく「生活」が存在します。  
角田さんも、『八日目の蟬』や  
『ツリーハウス』を書き終え、  
自分は大きな物事ではなく、  
「生活」・「日常」に目が向い  
てしまうことが分かったと話さ  
れました。

## ■女性の生き方

角田さんの小説の多くは、女  
性が主人公。女性の常に人生を  
かけて変化せざるをえない面に  
興味があるからだといえます。  
例えば、結婚や出産など、何か  
一つを選ぶことで人間関係も大  
きく変わります。小説中では、  
女性が問題に直面、その解決策  
を探る必要性から、男性にはダ  
メ男役を引き受けてもらうそう。  
林芙美子の書く男性には負ける  
と思います。と、ユーモア交  
じりにお話されました。

また、芙美子が戦争協力をし  
た作家として語られることが、  
残念だとも話されました。著書  
に「兵隊さんが好きだ」と書い  
たのは、決して戦争を賛美した  
わけではなく、庶民の代弁者と  
しての言葉でした。戦争賛美を  
高らかにうたう作家がいるなか、  
芙美子は自分の目で現実を見、  
戦争の実態を書きました。

戦後も、傷ついた人々に寄り  
添って書き、それは、「同情」

### 劇団青春座公演

#### もう一つの放浪記

～花のこのちはみじかく～

(橋本和子・作、井生定巳)

演出、上西昭南・制作)

平成25年5月18日・19日

戦後間もない昭和20年に創立された「劇団青春座」。220回目の公演は、林芙美子の生涯を脚本家橋本和子さんが書き下ろしました。



劇団青春座「もう一つの放浪記」写真提供:劇団青春座

舞台は、芙美子の葬儀の場面から始まります。一般の人々が次々と参列する様子は、庶民に寄り添って書き続けた芙美子の作家としての歩みを象徴する光景でした。母キクと行商に出る日々、東京での夫・緑敏とのやさやかな暮らし、そして、「放浪記」がヒットしてパリへ。舞

台は観客の笑いを誘いながら次々と展開しました。上条(白井晟一)との恋を諦め、家族が待つ日本へと戻った芙美子は、戦争経験を経て、戦後は身を削って書き続けました。

「放浪記」のイメージから離れ、昭和の激動期を孤立無援で力強く生きた芙美子を感じられる舞台でした。

#### 小倉昭和館協賛映画祭

##### 「北九州文学散歩

林芙美子と郷土作家たち

企画展開催にあわせ、協賛映画祭を行いました。林芙美子原作の映画と郷土作家の映画を組み合わせ、週替わりで3週間小倉昭和館にて上映しました。

第一週(5月18日～24日)

「浮雲」(1955年)主演・

高峰秀子、「無法松の一生」

(1965年)主演・勝新太郎

第二週(5月25日～31日)

「下町」(1957年)主演・

山田五十鈴、「砂の器」(1

974年)主演・加藤剛

第三週(6月1日～7日)

「めし」(1951年)主演・

原節子、「花と龍」(1962

年)主演・石原裕次郎

### 北九州市立文学館

#### 文学館セミナー

今年度より、恒常的な文学講座の開講をめざし、「文学館セミナー」をスタートしました。

前期は「書く」「創る」「読む」「話す」の4コースです。

5月から9月まで、月1回全5回のクラスを開講しました。

○書くコース(第一水曜日)

講師・後藤みな子さん(作家)

エッセイ、自分史など文章の書き方全般

○創るコース(第一水曜日)

講師・岸原清行さん(福岡県俳句協会会長、「青嶺」主宰)

俳句入門

○読むコース(第一木曜日)

講師・今川英子(北九州市立文学館館長)

岡本かの子など女性作家の短篇小説を読む

○話すコース(第一金曜日)

講師・三輪純子さん(スピーチセラピスト)

発声、呼吸法から朗読まで

多くの方に参加いただき、計

91名が前期コースを修了されました。

セミナーは後期(10～3月)

も新たな形で開講します。また、修了生が集う自主運営クラスのサポートも行っています。

後期セミナーの内容など、詳しくは文学館ホームページをご覧ください

後期セミナーの内容など、詳しくは文学館ホームページをご覧ください



<話す>三輪純子さん



<読む>今川文学館館長



<創る>岸原清行さん



<書く>後藤みな子さん

### ◆新資料紹介◆

#### 夢野文代・真田宏資料

戦前に北九州で活動した詩人の夢野文代とその長男真田宏の関連資料250点あまりの寄贈を受けました。

夢野は、福岡県生まれの鹿児島育ち。八幡製鐵所に勤める詩人高武陶村と結婚し、詩作を始めます。「第二次九州文学」に参加し、一九四三年に『蝶のすむ城』という美しい詩集を刊行しました。陶村との長男宏もまた同人誌への執筆など文学活動を行い、小説集『凧物語』を刊行しています。

資料は、ご遺族より真田の友人である椎窓猛さんに託されたもので、夢野とゆかりの深い北九州市へご寄贈いただきました。



平成25年度夏の企画展

七心ねは

イケナイ物語

北九州篇

### 戦争童話集原画展

作 野坂昭如  
絵 黒田征太郎

平成25年8月1日  
～9月8日

「忘れてはイケナイ物語」というのは、野坂昭如作『戦争童話集』を読み、衝撃を受けたイラストレーター・黒田征太郎さん（門司在住）がそれを映像作品、絵本にしようと命名されたプロジェクトです。多くの協力者を得て、『戦争童話集』12話、さらに沖縄篇「ウミガメと少年」「石のラジオ」の2篇を加えた全14話が映像作品、絵本として生まれました。

年のフランスの核実験をきっかけに、黒田さんが東京のアーティストと往復書簡のかたちでキノコ雲を描くことから始まった「PIKADON PROJECT」のイラストも含めて約2000点の原画を展示しました。

膨大な数の原画は、強烈なインパクトで見る人たちを圧倒します。戦後68年を経て、戦争の記憶が風化しつつある今日、かつてあった戦争、そして地球上のどこかでは今も戦争が続いている現実に対して、戦争のことを忘れず考えてほしいという黒田さんの強い想いが伝わる展覧会となりました。

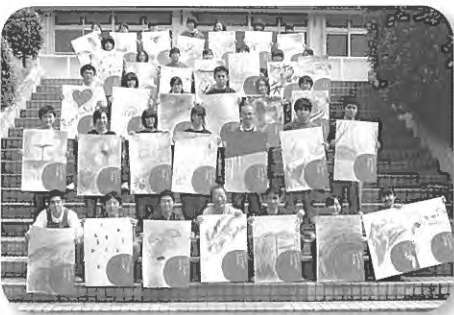
まず黒田さんが戦争とはどういうことなのかについてお話され、「戦争童話集」のDVDを上映。黒田さんの想いを受け止め、生徒たちは自らの感性をポスター制作にぶつけました。製作数は黒田さんが描かれたものを含め134枚。この手書きポスターは市内各所に掲示されました。また開会前日の7月31日には8名の生徒が展示設営を手伝いました。展示室一角の展示レイアウトを3年生の加来由香里さんを中心に、黒田さんの原画から伝わる想いをいかに見せるのか、丸一日かけて考え抜き、丁寧に展示を作り上げていきました。



右から、八幡中央高校坂本宗謙君、同僚崎康次校長、黒田征太郎さん、井生定巳さん、今川文学館館長

#### ● 展覧会準備

本展開催にあたり、黒田さんには「若い人たちと一緒にやりたい」という想いがありました。6月15日、黒田さんが八幡中央高校へ出向き、芸術コース33名の生徒たちと展覧会の告知ポスターを一緒に制作しました。



黒田征太郎さんと、八幡中央高校芸術コースの生徒たち

会場に入り、最初の展示は、赤い炎が吹き上げるような絵です。実はこれ、クジラのしっぽ

#### ● 展示

の原画です。潜水艦をメスのクジラと勘違いしたてかすぎるクジラは、敵の攻撃から必死で潜水艦を守ります。傷つき、血を流しながら、傷ついたクジラのしっぽが、この絵です。



戦争童話集の原画とセンターケース内の「きのこ雲」

続けて「凧になったお母さん」の原画を展示しました。空襲で町が焼けるなか、5歳のかつちゃんをお母さんは服を脱ぎ捨て、自らの汗を塗り、熱から守っています。その他、黒田さんが絵をいれた野坂さんの原稿や、「八月の風船」の原画、「青いオウムと瘦せた男の子の話」の板絵などが続きます。そしてセンターケースには、

約1000点のキノコ雲の絵が並びました。またその向かいには『戦争童話集』の原画を束にして展示しました。全て黒田さんの手書きで、その圧倒的な量からは黒田さんの強い想いが伝わってきます。

次に、八幡中央高校の生徒たちが展示のレイアウトを考え、設営した壁面です。モノクロのイラストから始まり、徐々に色彩を帯びてゆく構成は、未来を見据える生徒たちの眼差しを感じます。

最後に八幡中央高校の生徒たちの、この企画展での活動をパネルと映像で紹介しました。普段とは違う作業に、戸惑いながらも楽しんで参加してくれた様子がうかがわれました。

#### ● コーナー

展覧会場出口横では『戦争童話集』の絵本を配架、映像作品「戦争童話集」を上映しました。また紙と画材を準備し、おえかきコーナーを設けて「みんなの忘れてはイケナイ物語」と題し、展覧会で感じたことを絵や文章で書き、壁面に貼っていたいただきました。来場者の皆様の戦争に対する考えや、平和への強い想いが壁一面を覆いました。

## 黒田征太郎さん 開会記念講演

平成25年8月1日

開会を記念し、黒田征太郎さんにご講演いただきました。



黒田征太郎さん

まず、ご自身の幼いころ、そして戦争の記憶についてお話をされました。黒田さんは大阪大空襲を疎開先から見て、その非日常、実感のなさから「きれい」だと口にしたら、「あの火の下でどれだけ人が死んでいると思っているんだ」と近所のおじさんに殴られたエピソードを紹介。戦争を経験した自分でも、その恐ろしさが分からなかったのに、そんな簡単に今の子どもたちに伝わるはずはない、と率直な思いを語られました。

アメリカに渡り、グラフィックデザイナーとなった黒田さんは帰国後、野坂昭如さんと朝日新聞の仕事を通じて知り合われます。野坂さんは始めは「うつとおしく」感じながらも、何か好きだったと話される黒田さんの言葉からは、野坂さんに対する深い信頼と羡慕の想いが伝わってきました。

52歳で今度は移民として、黒田さんはアメリカに渡ります。ニューヨークで『戦争童話集』を手にとった黒田さんは、優しい文体で戦争の悲惨さ、悲しみを伝えていく本作に感動し、絵本にしようという決意。金銭的な問題を抱えながらも、多くの協力者を得、約三万枚もの絵を一人で描き、絵本・そして映像作品「戦争童話集」が完成します。

しかし黒田さんは達成感がなかった、と言われます。何も変わっていない、世界中で戦争は続いている。黒田さんは続けて沖繩篇の制作に着手され、野坂さんに書いてほしいと頼みます。しかし野坂さんは「俺は垂直に落ちてくる弾は経験したが、水平に飛んでくる弾は知らない。だから書けない」と断ったそうです。黒田さんは諦めず、野坂さんを説得し、沖繩篇が制作されました。

野坂さんを始めは「うつとおしく」感じながらも、何か好きだったと話される黒田さんの言葉からは、野坂さんに対する深い信頼と羨望の想いが伝わってきました。自然に感謝の言葉が言えれば、戦争は減るんじゃないかと提案されました。「これからみんなは大変な時代を生きていくんとちゃうかな、でも夢だけは捨てんといてな」と会場に呼びかけ、講演を終えられました。

### 黒田征太郎さんのおえかき部屋

平成25年8月17日

お盆明けの暑い日でしたが、たくさんの子どもたちの参加で盛り上がりました。

黒田さんは生まれてきた命がどれだけの奇跡か、その尊さをお話された後、その命と自分たちの大事なものを奪い去るのが戦争だとお話されました。続いて、午前は「凧になったお母さん」、午後は「小さな潜水艦に恋をしたかすぎるクジラの話を鑑賞しました。

おえかきの前に黒田さんの実



黒田征太郎さんのおえかき部屋

演です。クレヨンで描いた線をタオルでこすって柔らかくしたり、くしゃくしゃにした紙を花に見立てたりと、一メートル四方の白いキャンバスが黒田さんの自由な表現で彩られました。この絵は展示会場に展示しました。今度は子どもたちの出番です。戦争というテーマはあるが、縛られず自由に描いて、絵を描くことの楽しさを感じてほしいと黒田さん。自由に描くというのがなかなか難しかったようですが、サポートで参加してくれた八幡中央高校の生徒たちが話しかけ、一緒に話をする中で、イメージが湧いたようです。なかには一人で3枚の絵を描く子も。黒田さんの想いを感じながら、自由に絵を描くことの難しさと楽しさを感じていただけるといいと思います。

## 戦争童話集 朗読会

平成25年9月1日

朗読グループ「宙のサカナ」代表、野口和夫さんによる戦争童話集朗読会を開催しました。

第一部は『戦争童話集』の「小さな潜水艦に恋をしたつかいクジラの話」を、第二部は「八月の風船」を朗読されました。あらためて『戦争童話集』が伝える戦争の悲しみに想いを馳せる時間となりました。



野口和夫さん

### ● 来館者の声

戦争を表す作品を目にするだけでこんなに悲しい気持ちになるとは思いませんでした。これを機に改めて戦争、平和について考え直したいです。

(女性・20代)

戦争を知らない私たち、私たちの子ども、これから生まれる子どもたち：今から先、本当に「戦後」になる世界が来ることを願わずにはいられません。みんながこの展示を見て、感じて平和にしていくことを体や心で理解していけるのではないかと思います。

(女性・40代)

# 恋と革命に生きた女たち

作家瀬戸内寂聴のライフワークである、伝記小説に

登場する先駆的な女性10人を紹介します。「かの子撩乱」の岡本かの子、「お蝶夫人」の三浦環、「遠い声」の菅野須賀子など、恋、思想、芸術に生を燃焼させた女性たちの姿を展観します。特に、福岡県出身の伊藤野枝（「美は乱調にあり」）「諧調は偽りなり」については詳しく取り上げます。

## ◆会期

平成25年11月2日(土)～12月15日(日)

月曜日休館、11月4日(月)は開館、翌日休館。

## ◆観覧料

一般 500円

中学生 200円

小学生 100円

## ◆企画協力

徳島県立文学書道館

## ◆内容

田村俊子 『田村俊子』

岡本かの子 『かの子撩乱』

高岡智照尼 『女徳』

伊藤野枝 『美は乱調にあり』

『諧調は偽りなり』

三浦環 『お蝶夫人』

菅野須賀子 『遠い声』

金子文子 『余白の春』

平塚らいてう 『青鞥』

湯浅芳子 『孤高の人』

瀬戸内寂聴 「比叡」ほか  
◆関連イベント

## ○開会記念講話

講師：竹内紀子さん(徳島県立文学書道館学芸員)

11月2日(土) 11時～12時

無料、申込不要

場所：北九州市立文学館

## ○文学講座

講師：今川英子(北九州市立文学館館長)

① 11月9日(土)

「平塚らいてうと『青鞥』」

② 11月30日(土)

「岡本かの子」

いずれも13時30分～15時

無料

場所：北九州市立文学館

※各回事前申込が必要

○矢野寛治さん(書評家、映画評論家、「伊藤野枝と代準介」著者)講演会

講演会

11月23日(土祝) 13時30分～15時

「伊藤野枝の影と光」

無料

場所：北九州市立文学館

※事前申込が必要

詳しくは文学館HPから展覧会チラシをご覧ください。

## 資料寄贈者・提供者

青森県近代文学館、秋吉久紀夫、梓書院、天川悦子、池田美保、泉鏡花記念館、市川市文学ミュージアム、江口恵子、大石聡美、大岡信ことば館、大佛次郎記念館、岡田功、尾道市文化協会、柏木恵美子、神奈川近代文学館、風の道同人会、菊池寛記念館、北九州森鷗外記念会、現代短歌社、河野正彦、小海永二、古賀紀代美、後藤みな子、小山多由美、椎窓猛、品川利枝、柴田華世子、「自鳴鐘」同人会事務局、JKA、須永忠、仙台文学館、田中俊廣、谷喜美子、谷地元瑛子、鶴岡市立藤沢周平記念館、中尾實信、中島康紀、長塚節研究会、中村弘、中原中也記念館、新名規明、西尾市岩瀬文庫、梅光学院生涯学習センター、林嗣夫、日高宇、姫路文学館、ひらがなしゅっぱん、ふくやま文学館、堀江優子、深川淑枝、古川薫、文京区立森鷗外記念館、松井比呂美、松ヶ江郷土史会、森林雅浩、柳生じゅん子、山口公和、山口慶太郎、やまなし文学賞実行委員会事務局、ラーシユヴァリエー

## 受贈雑誌一覧

青嶺、赤とんぼ通信、馬酔木、santi、いのちの籠、色鳥、海、鷗外、沖、海峡派、北九州文化、九州作家、

九州俳句、九州文学、九大日文、群炎、月刊俳句界、月刊みんぱく、玄海、こだま、沙漠、七曜、自鳴鐘、周炎、人權の文化、船団、川柳あやめ、川柳くらがね、タルタ、小さい旗、天山牧歌、天籟通信、菜殻火、虹野、八雁、飛翔、ふだんぎ、べだる、耳空、與謝野晶子研究



<http://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

北九州市立文学館の情報は上記のインターネットサイトでもご確認ください。



- JR小倉駅より徒歩15分
- JR西小倉駅より徒歩10分
- 勝山公園バス停より徒歩1分
- 北九州市役所前バス停より徒歩2分
- 小倉北区役所前バス停より徒歩2分
- 北九州都市高速大手町ランプより2分
- 駐車場は文学館最寄りの各有料駐車場をご利用下さい

2013年10月1日発行  
北九州市立文学館  
〒803-0813  
北九州市小倉北区内4-1  
TEL 093-571-1505  
FAX 093-571-1525

■ 開館時間  
火～金 9:30～19:00(入館は18:30まで)  
土・日・祝 9:30～18:00(入館は17:30まで)

■ 休館日  
毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)  
年末年始